触について

――三和生触・成触論を中心として――

小川　宏

心所の一として触を実有とするか否かに関して概観すれば、その実有を強く主張する部派は説一切有部であり、根境識の三和する処に別に触が生じ実有とする。触の実有を主張する点では唯識大乗も同様であるとされる。これに対し、根境識の三和が即ち触を成ずるのであり、触は仮有であるとするのは、経部である。この部派に近い成実論も同様である。しかし倶舎論や成唯識論の諸註釈書によれば様々な解釈や意見が存し、一概に三和生触論は有部であり、三和成触論は経部であると決める事は困難である。また触に関して世親がいかなる考えを有していたかも倶舎論文上では明白であるとは言い難い。よつて特に㈠触に関する世親の真意、㈡三和生触論と三和成触論の二点について考察を加えてみたいと思う次第である。倶舎論10（世品三之三）では触について次の如く述べている。頌文では「触六三和生」とし、長行の初頭に「触有二六種一所謂眼触乃至意触、此復是何、三和所生、謂根境識三和合故有二別触生一」として、有部の本宗義に従い三和生触論を提示している。次で「五触生可二三和合一、意触三和合意根過去、法或未来、意識現在如何和合」との五触以外に六触三和合への疑問に対し、意触も㈠因果義と㈡同一果の故に和合と名くと答えている。これは婆沙論197（大正27―984上）の和合に二種ありとし、㈠倶起して相離れざるものと㈡同じく一事を弁ずるものとの二をあげるが、これは「意識相応の触は一事を弁ずるものの故に名けて和合となす」の説を受けて、それを二つに開いたもので、妙音の説とも同一である。次で倶舎論は「諸師於レ此覚慧」として次の二説を挙げている。㈠「有説三和即名為レ触」として三和成触論を述べ教証として「如二契経言一如レ是三法聚集和合説名為レ触」を引くがこれは雑阿含3（大正2―18上）の文とされる。㈡「有説別法与レ心相応三和所生説名為レ触」として三和生触論を述べ教証として「経言云何六六法門一六内処二六外

処三六識身四六触身五六受身六六愛身此契経中根境識外別説六触故触別有。」を引くがこの契経の文は雑阿含13（大正2—86下）の文とされる。なおこの雑阿含13の六六経を教証となして六触身を説く故に触は実有なりとするのは順正理論10の古昔師の六説即ち㈠果㈡雑染㈢離染㈣各別㈤断際㈥差別の中の第四、各別説の義と内容を同じくするものである。次で六六経の解釈をめぐつて問答があり三和成触論からの論証は順正理論の有余説と同一である。しかし倶舎論は成触論有利と思える論争を「如是展転更相難釈言論繁多故応且止」と打切つて「然対法者説有別触」として有部に結帰して別触論に立ち帰つている。では世親の真意は触をどう考えていたのであろうか。世親は倶舎論10ではその真意を明白にしていないが、問答往復の消極的な点や雑阿含13に明らかに三和生触論を示す教証があるにもかかわらず六六経を引く点などに有部説に加担せぬ心が汲取れる。また更に倶舎論4（根品—二之二）に「伝説如是所列十法諸心刹那和合遍有。」として触を含む十大地法の実有に関して伝説（Kila）の言を附している。これは光記4に「論主意朋経部、非信十法皆有別体」とあり、また称友の倶舎論疏に「伝説の語は他宗を顕す為である。」とある如く、十大地法の実有を認めぬ事を示していると考えられる。更に倶舎論28（定品八之一）には経部の証によつて「心所即心分位殊得名」とし又、倶舎論10（世品三之三）にも経部説として「或大地法義非要遍諸心」ともしている点から経部説に左袒して、十大地法の一として触の体の実有を認めていなかつたのが世親の真意と見てよかろうと思われる。次に三和生触論と三和成触論の部派の問題に移る前に触思想の歴史的考察をしておきたい。根境識の三和と触について阿含経では前述の如く雑含3（大正2—18上）に「縁眼及色眼識生。三事和合生レ触。」とあり同13（大正2—88上）に「眼識縁生眼識。三事和合触。」の二つの文が見られる。前の文は三和生触論の教証となり後の文は三和成触論の教証とされ阿含の中に概に両論の思想的萌芽を見出し得る。六足論の初期阿毘達磨論書では集異足論15（大正26—429上）には「眼及諸色為レ縁生眼識。三和合故触。」とあり法蘊足論12（大正26—509上）識身足論3（大正26—545中）界身足論上（大正26—615下）品類足論3（大正26—701上）にも同様の文が見られいずれも根境識の三和合と触を説くが三和生触か成触かの議論は未だ見当らない。ところが発智論20（大正26—1026中）になると「諸意触彼一切三和合触。答、諸意触彼一切三和合触。」との問答をあげている。発智論の旧訳とされる八犍度論30（大正26—911中）にも訳語は異なるが同内容の文がある。よつて発智論当時すでに三和と触との関係をめぐつて論争の生じていた事が察知される。その広釈書たる婆沙論197（大正27—983下）では発智論文を解説して「問何故作此論。答欲下

止他宗ニ顕已義上故。」としその他宗として「心所則心」とする派と「触則根境識」とする派とがあるとしている。この両派がいかなる派かは明言されていないが婆沙論149（大正27—760上）では十六触論において「譬喩者説触非ニ実有一（中略）離ニ眼色眼識一外実触体不レ可レ得。」との説と一致するので譬喩者の説と考え得る。なお成唯識論述記2本（大正43—274上）には経部の先駆としている。これで前述の如く発智論当時から生触・成触論争があり婆沙論でより詳細に考究されて来た事が判る。次で婆沙論綱要書時代には雑心論2（大正28—881上）は「触於ニ依縁心和合一生触境界。」とし入阿毘達磨論上（大正28—982上）は「触謂根境識和合生。令ニ心触レ境。以ニ能養ニ活心所一為レ相。」として共に三和生触論に基いている。倶舎論は既述の如くであるが順正理論は10（大正29—384中）において触体実有説に立つて経部・上座説への破折は詳細を極め婆沙論にも見られぬ古昔師の諸説をも集めて種々な立場からの論及がなされている事は注目に値する。一方、経部の論書は残されておらぬので知り難いが経部に近いとされる成実論6（大正32—286下）では三和成触論に立ち六六経を以つて問者に三和生触論の立場から問難させるのは倶舎論とは逆の形式である。倶舎論10の両説を世親はいかなる部派の説とも言明していないが、その註釈書たる光記、宝疏は共に三和成触論を経部、三和生触論を有部とする。しかし唯識学では成唯識論4（大正31—18下）の「若謂余時三和有レ力成レ触生レ触能起ニ受等一。」を解して述記4末（大正43—372下）に「自下第二経部中有ニ二師救一。一無ニ別触一。即三和是触故。二別有ニ触数一。三和外別有故。即今、経部猶有ニ二師一。彼皆余時三和レ力無ニ別触一故能成ニ於触一。有ニ別触一故能生ニ於触一」として三和成触論も三和生触論も共に経部の説とする。では光宝二記と述記の相違はどう考えるべきであろうか。この問題は初めは倶舎学よりも唯識学において研究された。倶舎論明眼鈔や倶舎論本義抄にはその論草が見当らぬが既に成唯識論同学鈔三之一（大正66—198下）には叙経部義の論章が見られる。これは成唯識論演秘が倶舎論の両説をも経部の説としたのを擁護している。下つては江戸時代の仏教学興隆期の三和生触・成触論の研究を概観すれば光宝二記の説に朋うのは快道の倶舎論法義、普寂の倶舎論要解、周海の倶舎論決択鈔、日南の倶舎論講義である。述記の説を承けて演秘の説に朋うものは湛慧の倶舎論指要鈔と成唯識論述記集成編、法住の金毛倶舎論、法海の倶舎論講義である。江戸期仏教学は湛慧の指要鈔と快道の法義との論争が最も詳細にかつ要領を得ているので両書を中心として考察してみよう。指要鈔10（大正63—887上）では述記の説を支持している。その理由は次の通りである。㈠倶舎論において頌と長行の初めでは有部説に従つて三和合の故に別触ありとし次に諸師覚慧不同として両

説を述べて並びに有説としているのは自宗の正義ではないからである。㈡二説並びに経を引いて宗を立するがこれは経部は経を以て量となす故である。㈢正理29や顕宗15には此の中間の両説をあげない、これは経部の説で有部の説でないからである。これに対し法義10（仏全326上）は、「光宝為レ尽。演秘混同之失。基師或無レ有レ過。」とする。その理由は「於三経部論二心所一有二全無一有二分無一分無中有二四異師一。」とし経部説に種々ある事を示す順正理論10（大正29—384中）によっていわゆる経部の五家をあぐれば㈠説三唯有レ心無二別心所一㈡執二三大地法一—受想思㈢或説有レ四—前三加レ触㈣或説レ有レ十—前四加二欲・恵・念・作意・勝解・三摩地一㈤或説二十四一—前十加二貪・瞋・痴・慢一となる。以上の五家の中で第二家を三和成触家とし第三・四・五家を三和生触家とし述記は成唯識論をこの経部中の二説で解したものであると法義は述べている。故に述記には過はないが演秘三末（大正43—871下）が唯識の説を倶舎の説にまで及ぼしたのは混同之失ありとしている。次に倶舎論は経薩両部とし、指要鈔の㈠については「此論顕末悉就二部別一鎮二部言一。何処有二自部之異解中相対称二我部一耶。固執之甚哉。」として同じ経部中で互いに我部と称える事はないと破し、㈡に対しては「正理十広破二経部一中経部証二三法聚集和合説名為レ触経一成二無別体一。次有部以二六々経一証二別体一遮二経部仮立一。全同二今義一。有人未レ見二彼文一。唯見二当段正顕一。彼無二此両説一者何耶。」として指要鈔が順正理論や顕宗論にこの両説を説く処が無いとするのを破しているがその通りである。更に既述せし如く、成実論七巻触品「以二三事和合名レ触経一立二無別義一。問者以二六々経一難等全是薩経也。」として成実論も三和成触論と三和生触論の争いであるとみている。なお倶舎論決択鈔11下（八十八丁右）において周海は旧訳倶舎論で㈠成触家を有諸師、生触家を有余師となす点に着目し生触家は有部たる事明白とし㈡「依二婆沙等一見二経薩二部異説一」とし㈢「宝師破二光釈義一為レ業然此中依二用光師釈一所三以有二其所レ拠也」と光宝の一致を傍証とする。次に述記説については㈠依二唯識経部救一今此文見二経部異説一」とし㈡更に大小乗論は各々その論によって解釈さるべきであるとする。結論として前述の如く㈠世親は触の実有は認めていなかったと思われる。㈡三和生触論と三和成触論の論争については、㈠倶舎論の両説は経部と有部の争いである。㈡成唯識論述記にあげられた両説は経部の異師である。㈢経部の中においても思想的変遷によって心所、特に触に関する考えにも発展があり、それを唯識大乗が継承し変化させたとも考えられる。㈣但し後世の演秘や同学鈔は倶舎論の説と述記の説とを混同している。

（五日市高校講師）